

## 司馬遼太郎「倉敷の若旦那」論

— その語りと登場人物の創出 —

### 一、はじめに

司馬遼太郎による小説「倉敷の若旦那」<sup>1</sup>は昭和四〇年六月『オール讀物』に発表された。この小説は、倉敷浅尾騒動の中心人物であった大橋敬之助（改名後、立石孫一郎）を主人公にした小説である。倉敷浅尾騒動とは、第二次長州征伐が開始される直前の慶応二年四月、長州第二奇兵隊の脱走隊員によって、倉敷代官所と浅尾藩陣屋が襲撃された事件である。その後、岡山藩・松山藩によって陣屋は包囲され退散し、幕府軍による攻撃によって隊は四散、立石は逃走し、舟で長州藩領に上陸するも、長州藩の手で殺害される。<sup>2</sup>「倉敷の若旦那」では、倉敷の町人大橋敬之助が、下津井屋の密輸出事件に憤怒し、下津井屋親子の殺害を行い、立石孫一郎と名を変え第二奇兵隊に入隊ののち、

## 森 瑠 偉

倉敷浅尾騒動を引き起こし、殺害されるまでを描いている。

「倉敷の若旦那」は、『オール讀物』に発表された後『昭和四十年年度 代表作時代小説』に収録される。その際、尾崎秀樹による「まえがき」<sup>3</sup>が付され、尾崎は収録作全てに講評を行っている。その中で尾崎は「倉敷の若旦那」について、「作者の人間観は、時代を語って、それが文明批判にまでつき抜けているところ」に独特な味がある。この味はあくまでも現代人の感覚だ」と述べている。山野博史は「司馬遼太郎短篇の面白さ」<sup>4</sup>の中で、「哀惜の念あふれる、しかし抑制のきいたことばの花をたむけて、ねんごろに葬るのである」と評する。このように「倉敷の若旦那」は物語の内容について評されることが多く、司馬による作品に対する言葉や、その典拠を踏まえた研究はこれまでにされていない。

ところで、この小説について司馬遼太郎は、『昭和四十年代表作時代小説』に収録された際の「作者の言葉」<sup>5)</sup>で以下のよう述べている。

想をおこすとき、できるだけ現地にゆくことにしているが、このときもそうだった。

岡山にゆき、倉敷にゆき、さらに下津井にゆき、下津井ではこの事件の研究者の角田直一氏からさまざまの話を書いた。

日帰りだったため、備中の風物のなかでこの素材をゆくり考えたかと思っただけが、はたせなかつた。

帰路、山陽本線の車中で、この立石孫一郎という人物をゆくゆく長編小説として考えてみよう、などと思ったりしたが、これまた果たせるかどうか。

(傍線は論者による、以下同)

発表から三か月後の「作者の言葉」では、作品を執筆するにあたり「この事件の研究者の角田直一氏から」話を聞いたことや、この短編執筆を機に、「立石孫一郎という人物をゆくゆく長編小説として考えてみよう」といった構想について記している。し

かし、ここで挙げられる立石孫一郎についての長編小説は、実際に書かれることはなかった。

作品発表から一年半後、そしてこの「作者の言葉」が発表された後に、『高知新聞』に書かれた「小説と歴史について」というエッセイで、司馬は「倉敷の若旦那」について再び言及している。そこでは、歴史と小説の関係を示しながら、「倉敷の若旦那」に関して以下のように記している。

「倉敷のことなら、角田直一氏に会われるといいです」

と、私がむかしつとめていた大阪の新聞社の社会部で書いたもので、その社の岡山支局から連絡してもらい、会っただけのゆるしを得た。児島市の角田氏宅をたずねると、ちようどお仕事であった。

(中略)

帰路、大阪への列車のなかで、角田氏の労著である『倉敷浅尾騒動記』(瀬戸内海文化連盟刊)を読み、読むにつれて史書としてきわだつてすぐれていることに驚き、右の「刺激」をもとめるよりも単に夢中で頁を追う読者になってしまった。想像をしようにもすべてのものがこのなかにすでに尽されておられ、立石孫一郎の問題と問題性はこの研究に

よって完結しているのである。

帰宅して私は、約束の小説を書かねばならなかった。しかし出来あがった「倉敷の若旦那」という私のつまらない小説は、この角田氏の研究業績から一センチも出ていない。ただ小説であるというだけのことである。どうにもならぬ敗北というものであろう。

この「小説と歴史について」も、「倉敷の若旦那」執筆前に立石孫一郎の調査のため、倉敷を訪れたことが書かれる。しかし、前掲の「作者の言葉」とは内容が異なり、自身の小説と歴史資料の関係について踏み込んだ記述と言える。つまり、発表三ヶ月後の段階では、「長編小説」の構想を述べていたのに対して、この記述では、『倉敷浅尾騒動記』において、「想像をしようにもすべてのものがこのなかにすでに尽されており、立石孫一郎の問題と問題性はこの研究によって完結している」事を述べた上で、「倉敷の若旦那」を「つまらない小説」「ただ小説であるというだけ」「どうにもならぬ敗北」と述べているのである。ただ作品発表から一年半ほど経過していることや、参考にした『倉敷浅尾騒動記』の著者に対する敬意が含まれている可能性を考慮した上で、この発言を受け取らねばならないであろう。後述

するが、この記述が自身の仕事を歴史家の仕事と区別して、小説家としての正当性を主張した上での発言であることも加味する必要があるだろう。ただし、角田直一による『倉敷浅尾騒動記』の記述を典拠に「倉敷の若旦那」が執筆されたことは明らかである。

そこで本稿では、「倉敷の若旦那」とその典拠である『倉敷浅尾騒動記』の共通点について説明した上で、典拠との相違点、特に語り手による評価の違いと、新しく作られた登場人物藤吉と語り手の関係について考察し、本作品における、歴史小説としての性格を明らかにしたい。

## 二、「倉敷の若旦那」と『倉敷浅尾騒動記』の共通点

角田直一によって書かれた『倉敷浅尾騒動記』は、昭和三九年九月に瀬戸内海文化連盟から発行された。先述の通り、司馬はこの『倉敷浅尾騒動記』を参考に「倉敷の若旦那」を執筆した。本章では、「倉敷の若旦那」とその典拠である『倉敷浅尾騒動記』の、共通する記述をいくつか提示した上で、それらについて考察を行う。

具体的な共通箇所の考察を行う前に、『倉敷浅尾騒動記』につ

いて簡単に整理しておく。

『倉敷浅尾騒動記』は、全二二章から成り、赤木元蔵と原三正による「序」と著者角田直一による「あとがき」が付される。赤木元蔵の「序」には「いわゆる備中騒動を取材した維新史につながる郷土史の一篇である」と書かれ、「従来地元に残る諸文献だけをもってしては充分知るを得なかつた事変の原因追及に、最も必要な資料の数々を発見提供せられたものということができ」と記されている。要するに、『倉敷浅尾騒動記』は、慶応二年に起こつた長州藩第二奇兵隊による倉敷浅尾騒動について、関係する諸文献を用いて、その事件の原因追及を行なつていたのである。さらに、原三正による「序」では、「一勤王家の生涯、その時代と環境を格調高い筆致で詳述しながら、中国地方の『擾乱』の母胎とその発生過程、更にその後始末に至るまで、心憎いほど人間の心理と事件の経緯を分析し、考察し、交響樂的な描写に成功している」と書かれる。この資料では、第一章で倉敷の商人事情が描出されたのち、第二章において倉敷で起こつた下津井屋事件について記される。下津井屋事件とは、倉敷浅尾騒動の首謀者となる立石孫一郎（事件の際は、改名前であり大橋敬之助と書かれる。下津井屋事件の後に大橋敬之助から立石孫一郎に改名する。）による、倉敷商人による密輸出を糾

弾した事件である。「下津井屋事件は、敬之助という一人の人間の内心に燃えていた叛骨に油を注ぎかけ、数年のちには備前、備中を驚愕させる大事件にまで発展するきっかけとなるのである」と角田が書くように、資料の中心である倉敷浅尾騒動と関わりの深い事件として書かれているのである。そして最終章である第一二章は「立石孫一郎の最期」と題され、立石孫一郎の死が他の隊員の末路とは分けて描かれている。

つまり、『倉敷浅尾騒動記』は倉敷浅尾騒動について記された資料であると共に、騒動の首謀者である立石孫一郎についての資料という側面も持っていると言えるであろう。このような資料の性格も踏まえつつ、以降で資料と小説について論じていく。まず、「倉敷の若旦那」では、主人公の大橋敬之助の来歴について、以下のように書かれる。

#### 「大橋の若旦那」

は、根っからのこの町のひとではない。播州三日月の大庄屋のうまれで、ついで母方の作州二宮村の大庄屋立石家 に身を寄せ、ここで剣を神道無念流の井汲唯一から学び、学問を森田節斎から受け、かつのちに天誅組の領袖となつた藤本鉄石などとまじわつて革命思想の洗礼をうけた。

縁あって、倉敷の大橋家に養子にきた。

このように作品の冒頭部で、大橋敬之助が大橋家に養子に入るまでの様子が記されている。大橋敬之助の来歴は、『倉敷浅尾騷動記』では以下のように記される。

敬之助は播州佐用郡上月村の大庄屋大谷五左衛門嘉道の長男に生れ、十七才のときには大庄屋見習になつていた。

(中略)

播州にいてもおもしろくないので、母方の叔父にあたる作州二宮村の名家立石正介の家にきた。

立石家は代々大庄屋を勤め正介は当時作州に於ける一流の尊王家であつたので、この家には志士の往来がたえなかつた。当時備中倉敷には羽栗謙次、島田方軒、植田亮哉とその弟井上文郁、楠公坊介城、林源介などの勤皇派があり、森田節斎のような学者がここで塾を開いていた。また作州津山藩には当時西日本を代表する剣客で、勤王家の井汲唯一がいた。備前藩には中条権右衛門、松岡林治郎、小松原源治、久岡喜源太、野呂久左衛門などがいた。

叔父正介の家に寄宿している間に敬之助はこれらの志士

と交わるようになり、勤皇意識が急激に成長していった。

特に井汲唯一に師事して剣道を学ぶことによつて、生来強い彼の神経が、いっそう強靱なものになつていったことと思われる。

(中略)

学問は本城新兵衛、森田節斎から、そして剣道は津山から井汲をむかえ或は金光村佐方に住む荒木要平から学んだ。

(中略)

天誅組の拳兵は敬之助の心を激しくゆさぶつた。彼は妻子を捨て、養家をすて、天誅組のあとにつづこうとした。藤本鉄石や吉村寅太郎とはかねてから知り合ひであり、敬之助は彼等のひとがらにひどく私淑していたからである。

敬之助の関わつた志士について省略されている箇所はあるが、「剣を神道無念流の井汲唯一から学び、学問を森田節斎から受け、かつのちに天誅組の領袖となつた藤本鉄石などとまじわつて革命思想の洗礼をうけた」ことなど、大枠は『倉敷浅尾騷動記』と共通した記述であることがわかる。

大橋敬之助は、倉敷の商人下津井屋の密輸出を倉敷代官に訴え、一度は下津井屋の罪が認められたものの、その後倉敷に着

任した代官桜井久之助によって、下津井屋は無罪放免となり、そのことに憤怒した敬之助は下津井屋を襲撃する。「倉敷の若旦那」では、その襲撃の場面の冒頭に次のような記述がある。

元治元年十一月の暮れ、敬之助は、養父と妻子を置いたまま倉敷の街を出奔し、二十日経った十二月十八日の深夜、黒覆面、黒装束の浪士九人をひきつれて前神川のほとりにもどってきた。

ここに書かれた、敬之助が倉敷を出奔した日時や下津井屋を襲撃した日時は、『倉敷浅尾騒動記』には、以下のように記されている。

元治元年（一八六四）十二月十九日の早朝、師走のいそがしい朝、倉敷町民は下津井屋一家の非業な最期を見てふるえ上った。

敬之助の倉敷出奔後二十日目にあたる一八日の夜、覆面浪士の一団（一説に九人）は下津井屋に闖入し、吉左衛門、寿太郎父子の首をはね、家屋に目を放つて風のように姿を消した。

『倉敷浅尾騒動記』では、下津井屋襲撃事件の一団を率いていたのが大橋敬之助であったか否かについて、「あきらかにすることはむずかしかった」が、「敬之助と一緒に倉敷を出奔した和栗吉次郎」の証言から「その推察はまちがいがなかったことになっている」と書いており、犯人が敬之助であることを示唆しつつも断言はしていない。それに対して「倉敷の若旦那」では、犯人が敬之助であると断定した上で、敬之助が襲撃する様子を描写するという修正を加えている。しかし、「倉敷の街を出奔し、二十日経った十二月十八日の深夜」に「浪士九人」によって下津井屋が襲撃されたという記述は、『倉敷浅尾騒動記』の記述と共通する。

さらに、敬之助が長州に入藩後、所属することになる第二奇兵隊が「岩城山」の「神護寺」に屯所を置き、そこは「星ヶ峰」「鶴ヶ峰」「月ヶ峰」「大峰」「高日峰」に囲まれた土地であり、「大洲鉄然」によって組織され、「周防」と「他国」出身者からなる「外人部隊」であったという記述も『倉敷浅尾騒動記』の記述が採用されている。

「倉敷の若旦那」は、大橋敬之助を中心に倉敷浅尾騒動を書いた小説である。そして、『倉敷浅尾騒動記』も、倉敷浅尾騒動についての資料であると共に、立石孫一郎の役割について詳述さ

れた資料であり、「倉敷の若旦那」の大枠が『倉敷浅尾騒動記』と共通する事は瞭然である。さらに、その記述内容の一部は『倉敷浅尾騒動記』の記述を用いて「倉敷の若旦那」は書かれているのである。しかし、「倉敷の若旦那」では、『倉敷浅尾騒動記』の記述とは異なる箇所も当然ながら存在する。次章以降で、『倉敷浅尾騒動記』の記述との相違点について考察していく。

### 三、語り手による評価の相違点

ここまで、「倉敷の若旦那」と『倉敷浅尾騒動記』の共通点について整理してきた。本章では、これらの相違点について考察を行う。「倉敷の若旦那」と『倉敷浅尾騒動記』は、大橋敬之助を中心に倉敷浅尾騒動について記していることはすでに述べた。しかし、騒動の中心人物である大橋敬之助の評価に関する記述は、「倉敷の若旦那」と『倉敷浅尾騒動記』では大きく異なる。まず、角田直一によって書かれた『倉敷浅尾騒動記』がどのような立場で記述を行なっているか整理する。「倉敷浅尾騒動記」の「あとがき」において、倉敷浅尾騒動について著者の角田直一は以下のように述べている。

倉敷事変は明らかに大和五条、生野事件と続く天誅組挙兵意識の発展であるにもかかわらず、それが正史の上で殆んど問題にされないのは、前二つの事変が文久期に起こったのに対し、それが慶応二年であったということである。僅か三年の歳月が天誅組拳兵方式を使い古された旧弊な討幕論にかえてしまった。そこに倉敷事変のもつ暗い宿命と、立石孫一郎のもつた人間的不幸があった。

ここで角田は、倉敷浅尾騒動が、天誅組の変と比較し「暗い宿命」であったこと、そして立石孫一郎の不幸について述べている。さらに、同じ「あとがき」で立石孫一郎のことを角田は以下のように記している。

彼の生涯の暗さに反して彼の人間性は案外に明るく、朴訥、正直であり、何ものにも恐れぬ不敵の気魄をもっていた。現代の時点に立って彼を観るとき、彼ほど非合理的、非打算的な人間はいない。彼は自己の設定した価値観に捕われそれから脱け出すことのできない男であった。彼は人間のタイプとしては未熟であり、荒削りで衝動的な要素をもっているが、それだけに純粹であり、その気骨には共鳴

を感じざるを得ない。「沈黙のなかで崩れるよりは、行動のなかで傷ついた方がよい」という理念を彼は封建社会の中  
で身をもって実践した。

角田は立石孫一郎について「非合理的」「非打算的」であることや、「自己の設定した価値観に捕われ」ていること、「人間のタイプとしては未熟である」ことを指摘する一方で、「それだけに純粹であり、その気骨には共鳴を感じざるを得ない」と述べており、立石孫一郎をかなり肯定的に捉えていることがわかる。さらに「この労作を世間に発表する理由もこの事変を幕末史全体の流の中で捉えようとする私の微意に発するものである」と続けており、この資料が倉敷浅尾騒動と立石孫一郎を肯定的に再評価しようとする角田の試みであることがわかる。このような角田による立石孫一郎観は、『倉敷浅尾騒動記』の本文においても随所に表れる。例えば、倉敷の町人であった大橋敬之助が、下津井屋の密輸出事件の訴えを倉敷代官によって斥けられたことに対する反応を描いた場面では以下のように書かれる。

取賄吏と奸商たちが幅をきかす倉敷には、道理の通る道はどこにもなかった。

倉敷代官所の黒々とそびえたつ高い土塀は彼にとつては憎悪と不信の対象になっていた。しかも下津井屋の密告によって、幕府のテロはいつおそいかかるかもしれない予感があった。友人の羽栗謙次もそれを指摘して彼の逃亡をしきりと勧告していた。倉敷にとどまることは、彼にとつて死をまつに等しいことなるう。敬之助は徒死を選ぶ気性の男ではなかった。道理をつらぬきそのために死することはいとわかない男であった。かれにとつて討幕は単に政治的な概念ではなく、ヒューマニズムを回復するためにも必要な倫理価値であった。

ここでは、敬之助が下津井屋の不正を検断するという「道理」をつらぬくために、「死することはいとわかない男」であることを記しており、大橋敬之助の行動に正義感を認める記述と言えよう。そして、「ヒューマニズムを回復するためにも必要な倫理価値」と書かれるように、敬之助が行う行動について、敬之助側から見た正当性を主張する記述であることもわかる。対して、「倉敷の若旦那」ではこの時の敬之助の心情を、次のように述べている。



「この一事だけでも幕府は腐りきっていることがわかる。代官が鼻葉をかかざれている以上、不正に検断を加えるのは、白刃によるほかない」

できれば天誅組が大和五条代官所を襲撃したように、敬之助は倉敷代官所をおそって桜井久之助の首をはねたかった。

が、それほどの軍事力がない。せめて下津井屋吉左衛門を襲って血祭りにその首をあげたい、というのである。

前述の通り、「倉敷の若旦那」の冒頭部で描かれる下津井屋襲撃事件について、資料と小説では大橋敬之助の関与について記載内容が異なる。このような状況の違いはあるが、大橋敬之助という人物に対する評価に変更を加えていることは明らかである。「倉敷の若旦那」では、敬之助の行動に正義感はあるもの、その正義感に正当性があるものとしては書かれず、短絡的な発想であるように描かれる。すなわち、『倉敷浅尾騷動記』では、敬之助の行動の正当性を語り手が認める姿勢で書かれているのに対し、「倉敷の若旦那」では、語り手が敬之助の行動の正当性を認める立場をとっていないのである。

このような語り手の姿勢の違いは、「倉敷の若旦那」の各所に

見られる。敬之助は倉敷出奔後、立石孫一郎と名を変えて長州藩の第二奇兵隊に入隊する。『倉敷浅尾騷動記』では、第二奇兵隊で実権を握るに至る過程について、以下のように記している。

この部隊のなかで立石の胆力と教養、武術、それに年齢は万金の重みをもち彼はやがて書記兼銃隊々長となって隊内において確乎たる地位を確立した。彼の才幹をもってすれば、彼の意図する方向に隊の一部をひっぱることは、あるいは可能であるかも知れない。寄合い世帯のもつ異様な荒々しさ、粗放さ、それに恐れを知らない突進力は何か事を起そうとするものには、たしかに利用すべき価値があった。

『倉敷浅尾騷動記』では、立石孫一郎を「才幹」のある人物であったと評価しており、隊の実権を握ることは、必然であるかのように書かれるのだ。それに対して「倉敷の若旦那」では、以下のように記される。

「立石殿は話せる」

と隊士たちは口々にいった。敬之助も、最初は豪傑気ど

りて過激なことを口走っては隊の人氣に投じていたのだが、気がついてみると心酔者が日に日にふえて、隊の事実上の軍監のようになりおおせている自分を知った。驚きはしたが、自分を見なおす気にもなった。もともとこれ、倉敷の一町人の身ではないか。

（おれは、これほどの男か）

大将に推されている自分を、無邪気によるこび、隊士一同の期待に応えねば、とおもった。天性、子供のような英雄主義がありすぎたのであろう。

ここでは、敬之助に才幹が無いとまでは書かれていないが、「無邪気」「子供のような」と書かれており、ある種幼稚な存在であることが書かれ、『倉敷浅尾騒動記』で書かれる「才幹」を持った人物像とは評価を異にすると言えるであろう。ただし、作品全体において、大橋敬之助の行動を否定しているわけではない。下津井屋襲撃の場面や倉敷代官所襲撃の場面では、襲撃方法に考慮しそれを成功させる様子や、「みごとな指揮ぶりで配下を動かした」と描かれることなど、敬之助の行動について好意的な評価もなされている。つまり、肯定的な評価を中心に記述される『倉敷浅尾騒動記』の立石孫一郎像とは異なり、「倉敷

の若旦那」では、資料で示される肯定的な評価を引き継ぎつつ、批判的な評価を新たに提示しているのである。そして、その肯定的な評価と批判的な評価を混在させ、大橋敬之助像をより客観的に描こうとしていると言える。

さらに、大橋敬之助の呼称の問題もこの箇所には含まれている。「立石殿は話せる」と隊士に語らせる一方で地の文では「敬之助」と描かれる。前述の通り、倉敷の商人であった大橋敬之助は、下津井屋事件のち長州藩へ出奔し、その際に名を立石孫一郎に変えている。『倉敷浅尾騒動記』では「敬之助が立石孫一郎と改名して、長州諸隊の一つである南奇兵隊（第二奇兵隊ともいう）に入隊した慶応元年の夏は、」という記述以降、大橋敬之助の呼称は立石孫一郎に統一されている。対して「倉敷の若旦那」では、この箇所の記述のように、立石孫一郎に名を変えた後も、地の文においては「敬之助」もしくは「若旦那」と呼称され続ける。すなわち、呼称の点では、作品内で大橋敬之助は立石孫一郎になっていないのである。作品タイトルも「倉敷の若旦那」であり、その死の場面でも「若旦那は、死んだ」と書かれているように、この作品の主人公は幕末の志士立石孫一郎ではなく、倉敷の若旦那大橋敬之助とされているのである。以上のように、「倉敷の若旦那」と『倉敷浅尾騒動記』では、

語り手による評価の違いが見受けられる。前章で示した通り、敬之助の来歴や関わった人物、出来事が起こった日時については『倉敷浅尾騒動記』の記述を採用しているのに対して、人物の評価については、典拠と異なる態度で記述しており、敬之助の人物像を批判的に捉えようとする記述が存在する点で、大きく変更が加えられた。さらにその評価は敬之助の呼称にも看取され、大橋敬之助は第二奇兵隊に入隊してもなお、倉敷の商人の若旦那である大橋敬之助であり続けるのである。

これらの「倉敷の若旦那」における語り手による評価については、『倉敷浅尾騒動記』には登場しない藤吉という人物の創出に大きく関わる。次章において、語り手と藤吉の関係について論じる。

#### 四、語り手と藤吉の関係

「倉敷の若旦那」では、大橋敬之助の従者として、藤吉という人物が登場する。この人物は「藤吉は、敬之助の生家にいた下僕で、敬之助が立石家、大橋家と軋々するあいだも、離れずについできた男である」と小説の冒頭部で紹介され、敬之助が死ぬ場面まで常に付き添う人物として描かれる。『倉敷浅尾騒動

記』では、敬之助が死ぬ場面において、兵助という人物と行動を共にしているが、この兵助と藤吉に関する描写には共通点がある。

敬之助は、第二奇兵隊が鎮圧された後、長州藩に舟で帰参を試みる。その際、『倉敷浅尾騒動記』では「孫一郎は一人の隊士だけの同行を許した。引頭兵助である。二人はひそかに上陸して、浅江村清鏡寺に入った」と書かれる。「倉敷の若旦那」では、「従僕藤吉だけがつき従った」と書かれ、『倉敷浅尾騒動記』において、兵助が担う役割が、「倉敷の若旦那」では、藤吉に変更されていることがわかる。敬之助は長州藩に上陸後、藩軍に通報され、島田川に架かる千歳橋の上で、藩兵に銃撃され死ぬが、その際の記述においても共通する箇所が存在する。『倉敷浅尾騒動記』では、藩兵に銃撃される場面で以下のように記される。

兵助には幸いにして弾丸が当たっていなかった。橋の東端に近い位置で、孫一郎は横に長くうつぶしたままで動かなかった。孫一郎は低い声で「橋からとびこめ！」とささやいた。

これに対して、「倉敷の若旦那」では以下のように書かれる。

敬之助は、血まみれになって橋板の上にくらがり、やがてうつ伏せに伏せた。すでに剣をぬき、右手にもち、刀身を抱くようにして伏せている。

「藤吉、橋からとびこめ」

小声でいった。

兵助は藤吉に名称変更されているが、「橋からとびこめ」と「小声」でささやくという記述が共通しており、「倉敷の若旦那」に登場する藤吉という人物が、兵助に関する記述をもとに書かれたことがわかる。しかし、『倉敷浅尾騒動記』に登場する兵助は、この場面だけに登場する人物であるのに対して、藤吉は「敬之助の生家にいた下僕で、敬之助が立石家、大橋家と転々するあいだも、離れずについてきた男である」と書かれるように、小説全編に渡って登場する人物である。つまり、敬之助と関わる人物として、兵助と藤吉では大きく役割が変更されているのである。以下、加えられた藤吉の役割について検討を行う。

藤吉が小説全編に渡って登場することは先ほど述べたが、主人公である大橋敬之助と対話する人物として作中に書かれる。次の引用は、倉敷襲撃計画について敬之助と藤吉が対話する場面である。

「若旦那」

と、従者の藤吉はある日、敬之助を人気のない仁王門のそばによびだし、たまりかねていった。

「あんな法螺はおつしやらないほうがいいかと思いますが」

「どんな法螺だ」

「倉敷をとるなどと」

「藤吉」

敬之助は顔色をかえた。

「おれに、倉敷が襲えぬとでもいうのか」

「いいえ、若旦那だけでなく、どんな名将でも倉敷はとれませぬ。どだい、無理でございます。だいいち、戦争もなにも、はじまっていけないではございませんか」

そのとおりであった。戦争のどさくさがはじまっているならまだしも、幕府と長州の間はまだ外交交渉の段階で、日本列島の津々浦々は、平穏無事の生活を営んでいる。

「藤吉、おれをたれだと思う」

と、敬之助はいった。

「立石孫一郎だぞ」

「若旦那、その人は、元龜天正の頃のお人じゃございませんか」

「おれの名だ」

敬之助は、にがりきっていった。藤吉にたしなめられたことが、かえって敬之助の心を倉敷襲撃計画にかりたてた。

ここでは、敬之助が計画する倉敷襲撃計画を藤吉がたしなめている。『倉敷浅尾騒動記』は、歴史資料として書かれたという性格もあり、大橋敬之助の台詞というものがほとんど存在しない。さらに、『倉敷浅尾騒動記』に登場する兵助が、立石孫一郎をたしなめる事をしないのは当然であるが、語り手を含め孫一郎の行動を止める人物は存在しない。それに対して「倉敷の若旦那」は歴史小説であり、当然ながら大橋敬之助の台詞が書かれており、その際に対話する相手として藤吉が設定されている。そして、その対話では藤吉によってたしなめられる事によって、『倉敷浅尾騒動記』に書かれる立石孫一郎像とは異なる大橋敬之助像が映し出されているのである。

この役割は、「倉敷の若旦那」における語り手の記述に影響を及ぼす。以下では、藤吉の立場と語り手の立場について考察を行おう。次の引用は、敬之助が下津井屋に天誅を加えることを述べる場面である。

「下津井屋に天誅を加えねばならぬ」

子供だ、と藤吉はおもった。敬之助の幼少のころから知っているが、度はずれて正義感がつよく、「三国志演義」などを読み、読みすすんで蜀漢の悲劇的な名臣諸葛孔明のくだりまでくると昂奮をおさえかね、ときに奥歯で口の肉を噛み切って唇から血を流したりした。

（たかが物語ではないか）

と藤吉などは思うのだが、敬之助若旦那にすればそんなものではなかったのである。

ここでは、敬之助が「下津井屋に天誅を加えねばならぬ」と述べた言葉に対して、藤吉の「子供だ」と思う感想が地の文で書かれる。さらに、「たかが物語ではないか」という藤吉の心情を括弧書きで示した上で、敬之助の心情までが描かれる。「倉敷の若旦那」の語りは、この場面で記されるように、特定の視点による語り手ではない。ここでは、藤吉の心情を地の文で書いている一方で、敬之助の心情についても地の文で書いている。ただし、前章で考察したように、「倉敷の若旦那」の語り手は大橋敬之助について批判的な立場を取ることもあり、肯定と批判を混在させ、客観的に描こうとする特徴がある。ここでは、敬之

助の行動に対して、藤吉の反応を地の文で描くという叙述を用いて、敬之助に対する批判的な捉え方を提示しているのである。

このような、語り手と藤吉の共犯関係とも言える箇所は、作品の随所に登場する。以下の引用は、先の引用に続く、下津井屋襲撃に至るまでの場面である。

「下津井屋を斬る」

と、敬之助が平然といった言葉は、藤吉を仰天させた。

町人が町人の家へ斬り込みをかけるなど、平和な町人のま  
ちにありうべからざる変事ではないか。

「な、なぜ、下津井屋の旦那を若旦那が斬らねばならないの  
でございませう」

「いまも言った。天誅だ」

と、このどちらかといえば生真面目すぎる倉敷の町人志  
士はいった。

敬之助の「下津井屋を斬る」という言葉に対して、地の文で「藤  
吉を仰天させた」との反応が書かれ、さらに、「町人が町人の家  
へ斬り込みをかけるなど、平和な町人のまちにありうべからざ  
る変事ではないか」と記される。この場面でも、地の文に藤吉

の心情描写といえる記述が示され、その記述は敬之助の行動を  
批判するような内容が描かれる。

このように、敬之助の行動に批判を加える存在である藤吉は、  
敬之助の死の直前においても、その批判性を持って敬之助に意  
見する。以下の引用は、倉敷から敗走し、長州に上陸後、長州  
藩との仲介を担う清鏡寺の住職の計略によって、長州藩軍の銃  
撃を受ける直前の場面である。

住職は、寺紋入りの提灯をもっている。それをことさら  
にぶらぶら振りながら歩いた。

「若旦那」

と、藤吉に疑念がおこり、敬之助の袖を何度かひいた。  
ついに敬之助は小声で叱り、

「おれは幼少のころから人の不正を憎むことはなほだしく、  
そのため他人とも無用の争いを重ねてきた。これほどまで  
に正義を愛しぬいてきたおれを、ひとが邪心を抱いてだま  
すわけがない」

「若旦那のいいところでございませうな」

藤吉は、悲しげにいった。

「しかし、御苦労のないお育ちでございませうからな。人の心

がおわかりになれませぬ」

この場面では、敬之助と藤吉の対話によって、正義を信じる敬之助の育ちの良さが示される一方、藤吉は、若旦那の育ちの良さが故の甘さを指摘している。ここでは、地の文による批判ではなく、藤吉の台詞が直接敬之助の行動を批判する内容となつて示されている。このように「倉敷の若旦那」では、藤吉の発言、藤吉の心境を描いた地の文、藤吉を介さない通常の語り手の視点の三点で主人公である大橋敬之助の行動を批判する記述がなされるのである。

司馬遼太郎は、自身の小説を「どうにもならぬ敗北」であったと評した「小説と歴史について」において、小説家と歴史家のしごとについて以下のように述べている。

私の立場を、のべてみたい。それぞれの創作家によって意見はちがうとおもうが、私の場合は、小説家には歴史を曲げる権利はないとおもっている。歴史は国民の共有財産であり、いかに小説であつてもそれを勝手に変形していいものではないであらう。だから、私の能力のあたうかぎりにおいて正確に期したい。その正確を期するために先人の

書いたものを読んだり、史料にあたったりするのだが、この段階のおもしろさというのは、私にとっていかなる娯楽にも代えがたいものである。

かといって歴史家でないというのは、その段階を科学的精神と方法でやり、それを完結させるといふのがその分野のしごとであり、小説家の場合は、その段階は単に創作的刺激をもとめるための予備運動にすぎない、ということである。いいかえれば、作家にとって資料というのは想像の刺激剤にすぎない。小説のたねではなく、あくまでも刺激剤なのである。

ここでは、歴史家の記述方法と小説家の記述方法の違いについて説明を行い、「作家にとって資料というのは想像の刺激剤にすぎない」と述べている。このような説明が行われた後に、自身の小説である「倉敷の若旦那」について「どうにもならぬ敗北」と述べているのである。このエッセイの中で、『倉敷浅尾騒動記』について「立石孫一郎の問題と問題性はこの研究によって完結している」と評している。「倉敷の若旦那」の大部分が「倉敷浅尾騒動記」に沿って書かれている点では「倉敷の若旦那」は「どうにもならぬ敗北」とも言えるであらう。しかし、自身

の小説家としての仕事と歴史家の仕事を区別している点で、この作品の試みは成功しているとも言えるのではないか。肯定的に描いた『倉敷浅尾騒動記』に沿って、肯定的に大橋敬之助像を描く一方で、語り手による評価や、藤吉という登場人物を創出し、その視点をを用いて大橋敬之助を批判的に描くことで、歴史資料とは異なる客観性を示しているのである。

## 五、おわりに

昭和四〇年に発表された「倉敷の若旦那」は、『倉敷浅尾騒動記』を典拠にして書かれた。『倉敷浅尾騒動記』は、倉敷浅尾騒動についての資料であると同時に、立石孫一郎についての資料でもある。「倉敷の若旦那」も大橋敬之助を中心に、倉敷浅尾騒動を描いた小説であり、その記述に共通する箇所も存在することから、『倉敷浅尾騒動記』の影響を看過することはできない。しかし、小説の語りと登場人物の創出の点で、「倉敷の若旦那」と『倉敷浅尾騒動記』の間には大きな相違点が存在する。

『倉敷浅尾騒動記』は、倉敷浅尾騒動と立石孫一郎を再評価しようとする試みで書かれたものであり、立石孫一郎についての評価はかなり肯定的な立場で書かれる。一方で「倉敷の若旦那」

は、その肯定的な評価を描きつつも、批判的に描く箇所も存在し、それらを混在させることで、客観的な視点から事件と人物を描こうとしている。さらにこの作品では、地の文で大橋敬之助は立石孫一郎とならず、あくまで倉敷の商人の若旦那である大橋敬之助が描かれる。このような点で、『倉敷浅尾騒動記』と「倉敷の若旦那」では評価の立場が異なるのである。

そして、敬之助の従者である藤吉という人物を加筆することで、敬之助の行動を批判する視点を創出している。『倉敷浅尾騒動記』は歴史資料であるため、登場人物の台詞が書かれることはない。「倉敷の若旦那」では、敬之助に常に付き添う藤吉という人物の台詞とその心境が描かれる地文によって、大橋敬之助の行動を批判する。つまり、この作品では藤吉の発言、藤吉の心境を描いた地の文、藤吉を介さない語り手の視点の三点で大橋敬之助の行動を批判する記述が行われるのである。自身のエッセイ「小説と歴史について」で、小説家と歴史家の仕事を区別しているが、本作品におけるその区別の方法は、これらの小説的創意と言えるであろう。「倉敷の若旦那」では、歴史資料で提示される客観性と異なる方法で、大橋敬之助の行動を客観的に描き、敬之助の見方を複数示すことで、歴史資料では言い尽くせない、小説の多様性を描き出しているのである。



注

(1) 司馬遼太郎「倉敷の若旦那」『オール讀物』第二〇巻第六号、昭和四〇年六月一日、文藝春秋社

(2) 倉敷浅尾騒動については、『国史大辞典 第十一卷』（平成二年九月三〇日、吉川弘文館）の備中騒動の項と『日本歴史大辞典 第四卷』（昭和六〇年、四月三〇日、河出書房新社）の倉敷騒動の項を参考にした。この事件の名称については、本稿で扱う資料が『倉敷浅尾騒動記』であることから、倉敷浅尾騒動に統一した。

(3) 尾崎秀樹「まえがき」『昭和四十年年度 代表作時代小説』昭和四〇年九月一日、東京文藝社

(4) 山野博史「司馬遼太郎短篇の面白さ」『中央公論』第一一巻一一号、平成八年九月一日、中央公論社

(5) 司馬遼太郎「作者の言葉」『昭和四十年年度 代表作時代小説』昭和四〇年九月一日、東京文藝社

(6) 司馬遼太郎「小説と歴史について」『高知新聞』昭和四二年一月二二日朝刊号

(7) 角田直一『倉敷浅尾騒動記』昭和三九年九月一日、瀬戸内海文化連盟

(8) 赤木元蔵「序」『倉敷浅尾騒動記』昭和三九年九月一日、瀬戸内海文化連盟

日、瀬戸内海文化連盟

(9) 原三正「序」『倉敷浅尾騒動記』昭和三九年九月一日、瀬戸内海文化連盟

(もり るい／本学大学院生)